

〈論文〉

様々なレベルの通訳コースにおける同時通訳の導入と訓練

熊谷 ユリヤ

I. はじめに

本稿は、通訳研究の一環として会議通訳活動をする筆者が担当する、様々な通訳教育の現場に於ける同時通訳導入や指導に関する考え方と発見を逐次通訳の場合と対比させてことを目的としている。この目的のため、標記テーマについての分析、考察を行い、同時通訳訓練早期導入の妥当性を論じたうえで、一定の結論を出したい。一般の日本人、通訳学習者、通訳者それぞれの、同時通訳 (simultaneous interpreting) に対する態度、を論じる。その後、通訳および同時通訳の種類と、それらが使われる現場について述べる。

次に、同時通訳者と会議通訳者など、通訳者の区分について、更に、通訳訓練および同時通訳志向の訓練法のバリエーションの導入について考察する。更に、日本における通訳教育の問題点の再確認を行う。すなわち、一部の日本の大学・大学院や民間の通訳学校には、「本来の通訳教育 (プロ通訳者養成)」もあるものの、大学での授業の大多数が、通訳訓練法を使用・応用した英語教育であるという問題である。

その後、様々なレベルと目的の通訳コースでの同時通訳導入の時期やサイクルを考える。つまり、一定の長さで区切って訳す逐次通訳 (consecutive interpreting) を十分習得してから、はじめて同時通訳の指導をするのか、同時通訳と逐次通訳を交互に指導するのか、平行するのかという問題である。

結論として、多様な目的・英語レベル・学習期間・通訳スキルの学習者に対する導入方法と、学習者に対するアンケートや評価結果に見る成果に言及する。結論として、様々な英語レベル、通訳学習期間、逐次通訳のレベルの学習者に対する同時通訳導入は可能であり、効果的であることを述べたい。

II. 「同時通訳」のイメージ

II-1. 同時通訳に対するイメージ

一般に、同時

日本では、同時通訳は「神業のような」あるいは「魔法のような」と称されることもある。通訳の中でも、同時に訳すという行為に対して、日本語と外国語、特に通訳の言語の大多数を占めている英語の文の構造が、日本語の去れとは全く異なることが、その原因と思われる。

英語を英語と日本語間の通訳を例にとれば、元発言のソース言語（SL=source language/ 起点言語）と、通訳者が訳出をする言語（TL=target language 目標言語）の、構造や語彙などの言語的特徴に類似点が多い。それに対して、英語と日本語では、英語の主語あるいは主部の後に動詞が来るのに対して、日本語では時に主語は省略され、最後まで動詞がわからない。その上、思考形態も、線形と渦巻き型の違いがあるため、結論の位置も英語が冒頭、日本語が最後になることが多いので難易度は高まる。

しかし、実際に通訳業務が可能なレベルに達するには適切な訓練の繰り返しが必要ではあるが、訓練の一環として同時通訳を行うという意味では、決して十分可能である。外国語（B 言語）の運用能力がある日本語母国語話者（日本語が A 言語）学習者に段階的な訓練を行うことで、一定のレベルの訳出をすることが可能となる。

II-2. アポロ月面着陸と同時通訳

西山（2000）によれば、アポロ 8 号に始まる生放送で同時通訳を初めて聞いた日本人のなかには、どんな機械が訳しているのかを問い合わせた人がいたため、通訳者の顔を映すようになった。1969 年のアポロ 11 号、月面着陸の際の名訳が、それまで同時通訳というスキルも、同時通訳者という存在も知らなかった一般の日本人にとって、人類初の月面歩行と同様のインパクトを与えたのだ。現在は当時ほどではないにしても、同時通訳が特別なものであるという潜在意識はある。

II-3. 通訳学習者・通訳訓練メソッド学習者

柴田（1997）『はじめてのウィスパリング同時通訳』、柴田（1998）『実践ゼミ ウィスパリング同時通訳』は、CD 付きではなかったにも関わらず、「英検準二級からできる同時通訳トレーニング」であることに勇気けられた英語学習者や、同時通訳など考えたこともなかった通訳者の間で注目された。本のタイトルが「ウィスパー」でも「ウィスパリング」でも「ウィスパー通訳」でもなく、「ウィスパリング同時通訳」であったことも、一因で

あると考える。

著者自身も、大学の通訳の授業や、通訳者に対して単発で行っていたスキルアップ講座のテキストに採用した。2004年と2005年にそれぞれのCD付が出版され、再び話題となり、大学のシラバス検索によれば、多くの授業や演習で教科書として採用されていた。アポロ同時通訳の際と異なり、自分がその同時通訳ができるとは思ってもみない学習者にとって、感動・自信・動機付けの重要な要因になったと思われる。

III. 通訳の種類・手法と習得すべきスキル

III-1. 逐次通訳

III-1-i. メカニズム

一般的な通訳形態である逐次通訳は、元発言者が一定の長さ、通常1文から1パラグラフ程度の長さのセグメントで、発言を一旦区切り、通訳者が訳す。これを交互に繰り返す。区切りが一定以上の長さの場合、通訳者は元発言者が話す間、ノート・テイキング（note-taking 通訳メモ取り）をする。区切りの長さは、通訳者のリテンション（短期記憶保持）スキルや、ノート・テイキングのスキルがある通訳者は更に長く訳すことができる。

III-1-ii. 基本スキルと現場

様々な現場で用いられており、医療通訳、アテンド/随行としては、空港送迎、観光通訳、ショッピング、ビジネス通訳としては、展示会、商談会、視察、講習、契約など、公的行事としては、レセプション、表敬訪問、司法通訳としては、法廷・接見通訳・事情聴取などがある。

更に、国際交流・教育交流、医療通訳、記者会見・取材などを含む。会議、セミナーその他、国際フェスティバル、スポーツ大会などをはじめ多くの場でも使われる。

低予算や少人数のセミナーや会議、学会やシンポジウムの分科会でも逐次通訳が選ばれることがある。それ以外のケースであっても、時間の節約よりも正確さ重視、一方向の通訳よりも質疑応答など双方向の通行くが主体となる場合は、逐次通訳を選択することも多い。

逐次を重視した基本的訓練は、人前で話すためのパブリック・スピーキング、短期記憶保持と再現（retention and reproduction）、ストーリーを再現して伝達すること（retelling）、ノート・テイキング、ノート・リーディング、要約（summarizing）などがある。

同時通訳と共通の訓練としては、音源と同時リピートをするシャドーイング、素早く訳出するための即時変換も含まれる。更に、対面での通訳のため、対人コミュニケーション

スキルや接遇の知識が必要となる。

III-1-iii. 逐次通訳にかかる時間

しかしながら、逐次通訳は、元発言と通訳を合計すると、元発言の約二倍の時間がかかるため、上記の現場のなかには、時間節約のため、下記のウイスパリング通訳あるいは、同時通訳を選択する場合も少なくない。

III-2. ウイスパリング同時通訳 (Whisper/Whispered Interpreting /Whispering)

III-2-i. メカニズム

ウイスパリング同時通訳は通常、ウイスパ、ウイスパー通訳などとも呼ばれ、その名が表す通り、元発言すぐ後、瞬時に耳打ち通訳（囁き）通訳をする同時通訳の一種である。日本では、会議やセミナーの大多数の参加者が日本人で、日本語がわからない参加者が数名のときには、一か所に集まってウイスパリング通訳また、パナガイドなどを使用する簡易同時通訳も行う。

III-2-ii. 基本スキルと現場

本来のブース同時通訳と基本的なスキルはおなじであるが、ブースではなく会場の平場、または移動しながら行う。最近では、国際会議・セミナーでのウイスパリング、ビジネスの場、工場視察なども、パナガイド等の簡易同時通訳機器を使用した同時性の高い業務が増えてきた。

同時通訳ブースや大きな機材は使わないだけで形態としては同時通訳であるため、通訳訓練方法は、逐次のそれとは異なる。また、通訳にかかる時間は、元発言にかかる時間に、質疑応答などで反対方向に逐次で訳出の場合は、その分が加算されるため、ブース内での同時通訳よりは時間がかかる。

III-3. 同時通訳

III-3-i. 同時通訳のメカニズム

同時通訳の際、元発言者は壇上や自席のマイクに向かって起点言語（SL）で話し、通訳者は同時通訳機材と装置を通じて送られた音声を、仮設または固定の通訳ブースで、ヘッドフォンをして聞きながら数語遅れで目的言語（TL）に訳して、訳しながら同時に次の発言を聞き取り、理解・分析し、目標言語に変換していく。原稿や資料がある場合は、それも読みながら、また、数字や複雑な固有名詞が出た場合は、同じブース内にいる別の通

訳者が取ったメモも参考にしながら、ブース内のマイクを通じて、会場のオーディエンスが持つレシーバーに送る。

III-3-ii. 同時通訳の現場

ウィスパリング通訳同様、会議、学会、シンポジウム、フォーラム、ミーティング、記者会見などの状況で予算がある場合、専門的な内容の場合、質疑応答が多い、あるいは討論形式の場合に用いられるが、最大の違いは、次に述べる多言語のリレー同時通訳が可能なことであろう。

III-3-iii. 同時通訳にかかる時間とリレー同時

また、2か国語間のみならず、3か国、4国語など、TLの数だけ通訳ブースを増設し、リレー通訳海外からの演者や参加者が一堂に会する貴重な限られた時間に、可能な限り多くの情報を発信・交換し討議をしたい場合、双方向の元発言時間とほぼ同じ長さの時間で終わることができる同時通訳を選択する。

III-3-iv. 同時通訳の機能

同時通訳は、発言を意味のチャンクごとの数語遅れで、ほぼ同時に訳出するもので、上記のような複数のタスクを並行してこなしていかなければならないため、会議などの時間の長さによって、2人から4人の通訳者が、15分から20分で交代して、集中力を保つことになっている。しかし、実際は、発言者の時間オーバーなどで、守られない場合もあるため、長時間連続の同時通訳でも集中力を切らさない訓練も必要となる。

III-3-v. マルチ・タスキング

上記のような「聞く＝理解する＝分析し記憶を保持する＝メモを見る＝瞬間に訳出する⇒訳している間に次のセグメントを聞く＝理解する・・・」といった同時進行の複数タスクをこなすために、同時通訳およびウィスパリング同時通訳の訓練では、後述するマルチ・タスキング（multi-taking）のトレーニングやエクセサイズを行う必要がある。

IV. 通訳者の区分

IV-1. 通訳者のカテゴリー

通訳のカテゴリーは、上記のように様々であるが、通訳者については、「会議通訳者」と「通訳者」に分けられるのみで、同時通訳業務が可能な通訳者でも、クライアントの希望、予算、

業務内容に応じて、逐次通訳をするか、ウィスパリング通訳か、同時通訳をすることになる。

IV-2. 会議通訳者（Conference Interpreter）と同時通訳者（Simultaneous Interpreter）

IV-2-i. 同時通訳者

日本通訳学会第 1 回大会が 2000 年に開催された際、西山千氏が記念講演「二カ国語の間（はざま）」と題した記念講演を行った。日本通訳学会編集部が作成した講演の記録には、西山氏の肩書が「西山千 日本翻訳家協会理事長・同時通訳者」となっていて、日本における同時通訳の草分けとしての存在に、まさにふさわしいものだ。

IV-2-ii. 会議通訳者

一般的には、国際会議での同時通訳ができる通訳者でも、別のシチュエーションでは逐次も行うため、「同時通訳者」という名称ではなく、「会議通訳者」と呼ばれる。

日本会議通訳者協会の [プロ] カテゴリーの入会条件は、「国際会議での稼働実績が 200 日（およそ 1,500 時間）以上あり、当会の会員審査基準（実績に加えてプロフェッショナルリズムと職業倫理の審査あり）を満たす現役の会議通訳者」である。

V. 通訳訓練法と同時通訳訓練法

通訳は逐次が基本であり、通訳者養成訓練の現場や通訳者の間では「通訳は逐次に始まり逐次に終わる」という言葉が常識となっている。これは、日本だけの考え方ではない。プロ養成にせよ通訳訓練法を用いた英語力増強にしろ、通訳訓練法は、実際の通訳演習のみならず、サブスキルの個別のトレーニングであっても「本番モード」のロールプレイ形式で行い、自分の訳出に頼っている受け手がいるのだという「ある種の責任感・使命感」と目的意識をもって行うことで効果が増す。そのため、たとえ適切な訳が浮かばなくても絶句することは許されず、説明的に訳してでも、とにかく発言者の意図を伝える訓練にもなる。

逐次訓練演習は、通訳の間その場で発言するのは通訳者だけであるため、パフォーマンスの面でも緊張する。一方、同時通訳の導入により、特別なことだと思っていた通訳ができたという感動や達成感が、モチベーションにつながるのみならず、逐次通訳と同時通訳に共通のトレーニングがあるため、スキル面での相乗効果も期待できる。

Ⅵ. 日本における「通訳教育」の特徴の再確認

Ⅵ-1. 両極

通訳教育先進国であり、バイリンガル、マルチリンガル、複数の文化的背景を持つことが全く珍しくないという環境での通訳教育を行うことができる国々という本来の「通訳教育（スキル・理論・知識）」とは異なり、日本では、一部の大学・大学院通訳演習・授業を除いては、大多数の授業で、通訳訓練法／メソッドを使用・応用した英語教育が行なわれており、バイリンガル・帰国子女を含めた、既に高度な英語運用能力を有する学習者に対する「本来の通訳教育（スキル・理論・知識）」と両極をなしている。

Ⅵ-2. 担当する大学の通訳の授業

Ⅵ-2-i. 通訳訓練による英語教育

筆者が担当する通訳関係の授業のうち、札幌大学の通訳翻訳エキスパートコース演習／ゼミナール、通訳Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、および、北海道大学の英語演習・通訳トレーニングが上記に該当する。開設三年目を迎えたエキスパートコースでは、高学年の留学帰国者のなかで、通訳養成レベルに耐えられる該当者が次第に増えつつ有り、近い将来に本来の目的である通訳者養成に軌道修正することが期待されるが、一般学生は、日本のほとんどの大学同様の状況にある。

Ⅵ-2-ii. ウィスパリング（同時）通訳の導入

これら学生たちに対する通訳基礎訓練は、一般に行われているような「まず逐次通訳スキルをきちんと習得させ、一定水準の訳出が可能になった後に、同時通訳を導入」というのではなく、動機づけ、モチベーションアップのために、あえて、早い段階で、ウィスパリング（同時）通訳入門トレーニングを導入している。

たとえば、後述の、同時通訳を意識した基礎トレーニングをウォーミングアップがわりに行った後、比較的平易な英語の文章を区切りごとに間隔を取ったものを聞いて学生がパートナーにウィスパリング同時通訳、またはCALLの同時通訳機能で訳し、次第にその間隔を狭めてオーバーラップする部分を増やし、3度目には間を開けずに普通で話されたスピーチを訳せるようになるというものである。20種類のエクセサイズのうち、上記を含めて10種類が、英語リスニング・スピーキング力増強のみならず英日同時通訳を意識したものである。

VI-3. 通訳者養成スクール

大学ではなく民間通訳者養成学校の多くは、英語レベルが一定の水準に達しない受講生は、養成コースには入ることが出来ず、予備コースで力をつけて後、本科に進級できる。一方、筆者が教務顧問としてシラバスデザインを行う地方の後発の養成学校では、入門・基礎レベルコースは、本来通訳スキルの入門・基礎であるはずのところ、実際は、「通訳訓練メソッドを通じた英語力アップ」を行いながら、まず通訳トレーニングが意味を持つレベルの英語力を、通訳訓練メソッドによって達成しなければならないケースがあることは否めない。

VI-3-i. 通訳学校基礎コース

具体的には、後進の育成のための通訳養成スクールとして、北海道でサミットが開催された2008年に、3レベル3クラス、約20名でスタートした北海道通訳アカデミーは、筆者が現在もカリキュラム・シラバス・教材作成を行い、不定期で授業を担当するが、現在は5レベル9クラス、約130名に増加しており、需要の高まりに応じて、2016年度からは5レベル15クラス、180名分の開講を予定している。このような需要の高さは、通訳者養成と通訳訓練法を用いた英語力増強という二極を並行して行うことと、比較的早い時期からの（ウィスパリング）同時通訳の導入などによる動機づけ、学習効果も要因であると考えられる。同校に於ける基礎レベルのコースでは、通訳訓練メソッドを通じた英語力増強を図って本格的なプロ養成に備える大多数の受講生と、既に高度な英語力を既に持っているが通訳スキルの初心者である受講生が混在している。一部の受講生のみが、アテンド通訳や現場や接遇通訳などの現場で業務を始めている。

ここでも、大学のエキスパートコース同様のエクセサイズを、通訳案内士受験も意識した教材や、アジアの英語を意識した音源も取り入れて行っている。同時通訳演習の例としては、前述に加えて、シャドーイング（shadowing）や数語遅れのシャドーイング、および、サイト・トランスレーション（意味の区切りごとに文頭から英語の語順で訳していく）を練習したのちに、書かれた英文（text）無しで、音源を聞いて、文頭から訳していくウィスパリング同時通訳も行っている。

VI-3-ii. 中級コースでの同時通訳導入

一方、北海道通訳アカデミーの中級コースでは、両極の折衷的な「英語力増強も視野に入れた通訳教育・通訳者養成訓練」を行っている。ここでも、早い時期に同時通訳トレーニングを取り入れ始め、逐次・同時・逐次・同時というサイクルとして、次第にウィスパリング同時通訳の比重を増やし、上級へつながらようとしている。後述の訓練のうち、

高度なマルチ・タスキングやリレー通訳を除いたエクセサイズや演習を指導している。

ウィスパリング同時通訳と簡易同時通訳器のほかに、各学期後半には、同時通訳ブースを体験する機会がある。中級の受講者の一部は、ビジネス通訳やプロとしてのののうちから、会議通訳者を意識して、逐次のみならずウィスパや同時通訳をすること、これらの機器やブースの装置を使用することで、やはり、モチベーションが一気に高まるというフィードバックが圧倒的多数である。このレベルでは、効用の説明をしながら同時と逐次志向の訓練や通訳演習をサイクルで行って、成果が上がっている。

VI-3-iii. 上級コースでの同時通訳指導

上級は同時通訳を学ぶためのコースとしてスタートしたが、北海道では、A 言語から B 言語への同時通訳も常に行わなければならないため、上級コースであっても、日英のトレーニングは、逐次を行っている。このレベルでは、既に同時通訳活動をしている受講生が3分の一、大多数が、一般通訳業務かインハウス（社内）通訳業務をしている。このレベルでは、後述するトレーニングすべてと、そのバリエーションを加えて常に刺激を与える工夫をして、同時と逐次をパラレルで行っている。

このレベルの受講生たちも、同レベルの内容の素材であれば、同時通訳よりも逐次通訳のほうが実は難しい、ということは実感しているため、パラレルの必要を感じている。

無記名の記述式アンケートでは、数年前には、入門や基礎コースに入学して、「同時通訳を自分ができると思っていなかったのに、それが、出来たことに感動して、必死で勉強して会議通訳者になろうと決心した」という受講生たちもいるため、一定の成果を上げているものと考えている。

通訳学校の中級・上級のレベルの学習者は、プロ通訳者になるための、あるいはプロ通訳者として更に向上するためのスキル習得を、最大の目的として通っている。通訳理論に割く時間は極度に限られてくること、基本トレーニングより通訳演習をしたいという希望が強いことが特徴であるため、通訳演習風の基本訓練を工夫している。

VII. 日本における同時通訳発生から学ぶ

終戦後の東京裁判では、ヘッドフォンをして一見同時通訳に見える写真にもかかわらず、実は予め翻訳された原稿を読む「同時朗読」であったという。西山（2000）には、同氏が日本で初めて日本語から英語の同時通訳を試みた経緯が記されている。終戦直後、国連が設立された時は、「国連で同時をしているのだから日本語もできるのではないか」との米軍の指摘に、同氏はじめ他の通訳者たちも「語順が反対なので絶対に不可能だ」主張した

という。

その後、5年間、米軍の通訳をするようになって、英語・日本語のバイリンガル・ネイティブウ・スピーカーである同氏は、当初逐次をされていて、当初、時間節約のため早口の逐次をしているうちに、心理的にある種の衝動に駆られて、すぐに通訳したくなったという。その後、次第に、半センテンス遅れの同時通訳ができるようになったという。

もともと、戦後の慌ただしいときに何とか時間が節約できないかという発想から生まれた、「語順が違うので不可能」なはずの日英同時通訳は、その後、「心理的にある種の衝動に駆られて」という点に、通訳者という役割を果たしていた同氏の使命感を感じる。その後、同時代の通訳者たちとともに、SL 起点言語の語順で、自然な日本語に聞こえるような、たとえば受動態を能動態に変え、品詞を変えることをはじめ、様々な方略が工夫された。

VIII. 目的に応じた通訳訓練法

VIII-1 以下は、英語力増強・逐次通訳訓練・同時通訳訓練に共通として分類し推奨するエクセサイズである。

- ・ **Quick Response** クイック・リスpons 単語、フレーズ、短い文を聞いて瞬時に反対の言語を口にする（語彙力増強、即時性の訓練）・**Fluent Reading** / フルーエント・リーディング：プロソディーにも気を配りつつ、内容を理解し、意味のチャンク（かたまり）を意識して音読。黙読や口だけ動かし、頭の中で声を出す気持ちで読む
- ・ **Overlapping** / オーバーラッピング：文章や、動画のサブタイトル（字幕）を見ながら、英語音声聞き、発音・抑揚などをシンクロしての音読
- ・ **Prosody** プロソディー・シャドーイング：オリジナル音源の抑揚・発音などプロソディーを忠実に再現
- ・ **Contents** コンテンツ・シャドーイング：意味・内容の理解に重きを置いたシャドーイング
- ・ **Slash Reading** スラッシュ・リーディング：英文テキストに / // （主部が長い場合は動詞の前に V を入れることも）を入れて文を意味のチャンクで区切りながら速読する。この際、左から右に自然に読むのではなく、 / /（または //）で区切られた意味のチャンクのみを上から見て、一目で読み取り、情報を把握したら、次のチャンクへ。このとき英文を口にしない。

VIII-2. 逐次通訳を意識したエクセサイズ

以下は、AIIC 国際会議通訳者協会主催の TOT (Training Of Trainers) は、通訳訓練をする側のための通訳訓練セミナーで、講師の Andrew Gillies 氏から最初の半年間に導入するものとして紹介された内容を応用した、どちらかといえば逐次通訳訓練を意識したエクセサイズである。

しかし、英語力を強化しながらの通訳教育の必要性がある日本では、これらは、同時通訳の訓練とすることも可能であり、必要であると考えて、筆者はこれまでも逐次通訳訓練を同時通訳訓練に応用し、同時通訳訓練を逐次指導に取り入れていた。あるいは、同時通訳訓練の合間、あるいはサイクルとして行ってきた。「逐次通訳という複雑な作業を構成するスキル要素を、個別に訓練してから再結合する」指導法を提唱する Gillies 氏の指導を受け、これまで書籍や論文の紙上で理解し指導に取り入れていた、伝統的な逐次通訳教授法と最新の指導法の橋渡しとなる各種訓練を応用して 同時通訳として取り入れる試みも行い、アンケート結果でも、評価テストでも早くも効果がでている。例として、句読点や文の区切りの空白も取り払ったテキストを読みながらのサイト・トランスレーションや同時通訳を、比較的平易な文章から次第に難易度をあげていくトレーニングがあげられる。

- ・ **Public Speaking**/パブリックスピーキング (準備時間あり) 日本語、英語でのスピーチ (滑舌、抑揚、声量、顔上げ)
- ・ **Public Speaking** (準備時間無し) 考えたり準備する時間を与えずに、与えられたトピックで英語で 1 分～10 分の幅で時間を決めて話す。これを別の受講者が通訳してもよい。考えながら話すという「マルチ・タスキング」という側面からは、同時通訳訓練にもなる。
- ・ **Retelling** リテリング ストーリーや物語性のあるショートスピーチを英語で聞いて、そのまま他の人に伝える。
- ・ **Visual Training** あまり予備知識のない画像を見ながら、その詳細についてのスピーチを英語で聞き、再現する。
- ・ **Summarizing** サマリー パッセージの内容を、要約通訳またはオリジナル言語で要約する
- ・ **Note-taking** 通訳メモ取り dictation のようにすべてを書きとるのではなく、聞いて理解し、忘れてはいけないことを簡単な記号、イニシャル、画数 の少ない漢字、簡単なイラストで書き、それを見ながら反対の言葉で文を構築 箇条書きは縦に書く。文字や記号は大きめに。分の区切りに」など。

VIII-3. 同時通訳を意識したエクセサイズ

以下は、同時通訳を意識した訓練として分類し、推奨するが、前出の日本の通訳訓練事情に鑑みて、英語力増強も視野に入れた逐次通訳訓練にも、また、ルティーンウォーミングアップ訓練にも使うことができる。

- ・ **Delayed Shadowing** デイレイド・シャドーイング：できるだけオリジナル音源から遅れて、正確に再現：この際厳しく指導しているのは、長く下を向くと無意識に頭の中で翻訳してしまうため避けることである。把握したらすぐに視線を上げて、ペアワークの相手や、一人の場合は、鏡に向かって反対の言葉で自然に話し、次のチャンクへ進む。何度も出てくる単語、長い単語は上から見て認識すること、機能語はあえて見ないことで速読につながると考える。
- ・ **Sight Translation** / サイト・トランスレーション = サイトラ : **Slash Reading** が訳出はせずに速読を目的としたのに比べて、サイトトランスレーション（通称「サイトラ」）は意味の区切りごとに文頭から英語の語順で訳していく。単なる文頭からの頭ごなし訳（FIFU=First In First Out のようなスラッシュ間の左から右にすべて読む“→”形）のような左から右への線形読みはせずに、上から一度にチャンクを見て、英語の単語数の4分の1から6分の1を占めている訳出を要しない機能語をいちいち読まないこと、更に、長い英単語も、文脈を考慮して、上から見て一瞬で理解する訓練をする。例として、“University” “globalization” のように一目見てわかる長い単語や大文字で始まるもの、頻出のものは、漢字のように捉えながら、英語の語順で文頭から理解し、日本語に訳出していく。
- ・ **Sight Translation** は動詞のリテンション（記憶保持）や、態を変える、品詞を変えることで、スムーズな訳出ができる。
- ・ **Segment Listening** ⇒ **interpreting** 区切り聞き⇒リテンション（記憶短期として保持）、クイック・リスpons : **Retention / Reproduction** / リテンション・リプロダクションフレーズ、短文、長文；英文のセグメントのまま記憶（オリジナルの英文できるだけ正確に再現）これをだんだん長くしていく。完全に言えなれば、ほかの英語でも良い。このオーバーラップする部分を次第に長くしていくことで、「気が付けば同時通訳」ができていく。
- ・ **Multi-Tasking** マルチ・タスキング：シャドーイングや同時通訳をしながら、暗算をしたり、一定の数を足し・引きしていくなど、全く異なる作業をしてストレス耐性を高めるトレーニングは、同時通訳のみならず、ストレスの多い仕事と考えられている通訳業

務を遂行する訓練としても有効である。

VIII. 同時通訳導入の時期・平行・サイクル

VIII-1. 時期

多様なレベルの英語運用力・通訳スキルレベル・目的の学習者に対する同時通訳導入の時期・サイクル（逐次を十分習得してからか、交互か平行して学習か）については、一般には、逐次通訳がかなりできるようになった段階で、または、通訳業務の中で、ウィスパー通訳の必要性が出てきた段階で、同時を導入することが多い。

筆者の指導法は、入門・基礎レベルでは新学期開始後1ヶ月経過の早い時期に、ウィスパリング（同時）指向の基礎訓練を取り入れて、平易な文章でのA言語への段階的同時通訳を行う。すでに高度な英語運用能力を有する学習者に対しては、本来の通訳教育（スキルと理論）、通訳訓練法を使用・応用した英語教育、そして、英語力増強も視野に入れた通訳教育／訓練が含まれる。直接的・間接的な効果。モチベーションを高め、集中力、マルチ・タスクのトレーニングも行う。単発の同時通訳演習を行い、逐次に戻るというサイクルである。

たとえば、ウィスパリングは本来同時通訳の訓練を受けていなければならないが、中級コース受講生が担当する商談などビジネスの場面では、逐次を依頼されていたのに、時間が足りなくなると、クライアントから「同時」を急ぎに依頼されることもあるため、逐次レベルの受講者の間にも、学習のニーズがある。

VIII-2. パラレルまたはサイクル

同時通訳を先に導入することは考えられないものの、逐次通訳訓練の早い段階、一定段階での導入は、先に述べた理由で、大きなモチベーション・トリガーとなる。もちろん、比較的平易な内容の音源であったり、逐次通訳をした後で同じ音源を同時に使うこともある。感動、動機づけとしての効果は、後述のアンケート結果でも証明され、毎回80%～90%の回答者が効果を感じている。

X. 導入方法

多様な目的・英語レベル・学習期間・習得しているスキルを持つ学習者に対する導入方法として、同時通訳の導入の際には、逐次しか経験のない初心者、特に基礎レベルでは、単語単位ですぐ反応して訳出し、本来のチャンクとは異なる断片的な訳出をしがちである。しかし、自然な流れを妨げない限界まで、waitingをすることにより、より正確な情報と

自然な TL 目標言語になることを、この段階からしっかり理解してもらい、意味のまとまりで、意味のある通訳ができる時点まで、待つことに慣れてもらう。

ここを経調しないまま導入をすることで、のちにこの悪癖が定着してしまう危険性があるので注意が必要である。逐次通訳の場合は、会議やワークショップなどタイトなスケジュールを思い、クライアントの時間を有効にしたいということで、SL 起点言語の単語単位に反応してしまうケースもある。

筆者も「西山千通訳講座」の受講当時、「もっと待てませんか?」「もう少し待てませんか?」と何度も指摘された記憶がある。たとえ入りが遅れても、訳し終わりは数語だけのずれであることについて、当時東京から札幌まで月に一度通訳講座のため指導にわざわざ出向いていた西山氏が、「出発時間が 30 分遅れた飛行機が、目的地の千歳には 10 分遅れて到着したことを例にとり、予測を活用、不要な主語や繰り返し避け、表現を完結かして、catch up する方略について話された。

XI. 情報処理量とストレス耐性

通訳をすることは多くの学習者にストレスがかかる行為であるが、同時通訳になればそれはさらに加速される。また、同時であることにより、情報の処理力が非常に大きくなるので、準備の面でも、速読や文頭からの訳やスキムリーディングやサイト・トランスレーション、語彙増強の動機となる。

逐次通訳の場合、草柳 (1998) の計算によれば、一日の会議で、A4 換算原稿用紙では 90 枚、通訳者 2 人体勢なので、一人当たり、A4 サイズ用紙、20 枚×3 時間つまり、60 枚になる。英日通訳の場合も同様で、400 文字換算 90 枚となる。翻訳者の場合、一日 8 時間かけて訳しても早い人で、20～30。それに比べて逐次通訳者は 3 倍以上訳していることになる。日英も 1 時間 400 字詰め原稿用紙 25 枚の発話を訳す。3 時間で日本語 75 枚、それを英訳すると A4 サイズ 25 行で 90 枚となる。

同時通訳は、6 時間の会議の場合 3 人体勢なので、1 人あたり 2 時間。英日も日英 60 枚分になる。逐次より情報量が少ないものの、高度に専門的なものが多い傾向にある。

XI-1. 究極のアクティヴ・リスニング

同時通訳の場合、普通に人の発話を聞いて自分だけが理解できれば良いのでは決してなく、次々に聴いて瞬時に理解し瞬時に訳して自然に話すので、Gile の「努力モデル」と「綱渡り仮説」によれば、作業記憶 (working memory) が飽和状態になり、あたかも綱渡りをしている時かのようなストレス負荷が連続してかかった状態になる。

通訳者が同時通訳中の処理容量は、キャパシティーの上限に達している、あるいは近くなっている。それを克服するストレス体制をつける必要がある。

XII. 無記名の記述式アンケート

XII-1. アンケートの概要

筆者が担当する、札幌大学と北海道大学の通訳演習科目、および、北海道通訳アカデミーでは、各学期終了時に、無記名の記述式アンケートをとっている。本稿のテーマである「ウィスパリング同時通訳や同時通訳を、企画的早い段階で取り入れる」という試みを開始した2008年からのアンケート回答によれば、学生および受講者が実感している効果は、次のとおりである。

XII-2. 大学生の回答

英語スコアの低い通訳初級クラスでは、通訳ができてだけでも驚きであるのに、ウィスパリング同時を体験し実際にできるという感動と衝撃が最も大きく、効果については、動機づけが最も大きい。スコアの高い学生の通訳初級演習では、上記と同様の感想に加え、自主トレーニングを続けた結果、TOEICやTOEFLなどの点数が伸びたという学生も多い。また、通訳中級・通訳上級者クラスでは将来的に通訳者になりたい、あるいは英語を使った仕事をしながらインハウスの通訳者的な役割も果たしたいなど、具体的な目標が芽生える学生、通訳学校に通ってくる学生も珍しくない。

XII-3. 通訳学校受講生の回答

通訳学校では上記のような回答に加えて、基礎レベルでは、簡易同時通訳器やブースを早い段階から体験できたことで、本来は英語力アップのために通っていたが、具体的に通訳者を目指す気持ちになった人が多い。

また、中級レベルでは、逐次通訳のトレーニングは通訳スキル向上のためだが、同時通訳のためのトレーニングをすることによって英語力が上がるという感想や、一般の通訳業務でも、ウィスパリングを要求される時があって役立っていることが特徴的である。

上級レベルでは、同じレベルの教材であれば、「同時よりは逐次のほうが難しいという実感ができた」という意見も例年で見られる。また、これまでの通訳学習歴を振り返って、早い時期からウィスパリングだけではなく、ブース体験もできたことが、会議通訳者に成長するうえで、動機の面でもスキルの面でも英語力の面からも、このメソッドが役立ったという回答が毎回みられる。

XII-4. 指導側の考察

このメソッドは、担当する全クラスに取り入れたため、導入しなかったクラスとの比較はできないが、特に、通訳学校ではこの8年間にのべ12名の会議通訳者がデビューをし、一般通訳者で必要に応じて業務としてウィスパリング同時通訳ができる人がのべ40名以上であることを考えると、一定の有効性があると思われる。

XIII. 結論

通訳訓練早期の緩やかな同時通訳の導入は、何にもまして、学習者の感動、動機づけに大きくかわかる。もちろん、「通訳は逐次に始まり逐次に終わる」あるいは、「同時と逐次を比較すると、同程度の難易度では、逐次のほうが難しい」と多くの会議通訳者が実感しているとおり、逐次の訓練を怠ってはならない。パラレルあるいはサイクル導入によって、相乗効果が達成され则认为る。

本稿では無記名記述式アンケートの詳細な分析は本来の目的ではないため行わなかったが、今後、このテーマのみならず回答を分析して統計的な結果も出したいと考えている。

[参考文献]

- Aarup, Hanne (1993, Taylor & Francis Online 2010) "Theory and practice in the teaching of interpreting", Pp.167-174, *Perspectives: Studies in Translatology Volume 1, Issue 2*,
 Baddeley, A. (1987) *Working Memory*. Oxford Psychology Series. Oxford University Press.
 Kalina, S. (2000) "Interpreting Competences as a Basis and a Goal for Teaching" *The Interpreters' Newsletter* 10, 3-32
 Gile, D. (1995) *Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training*. Amsterdam/Philadelphia John Benjamins.
 - (2009) *Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training*. Revised Edition. Amsterdam/Philadelphia John Benjamins.
 Gillies, Andrew (2013) *Conference Interpreting: A Student's Practice Book*. Routledge.
 Jones, R. (1998). *Conference Interpreting Explained*. Manchester, UK & Northampton, MA: St. Jerome
 Mikkelsen, H., Jourdenais, R. ed. (2015) *The Routledge Handbook of Interpreting* Routledge
 Pöchhacker, F. (2004) *Introducing Interpreting Studies* Routledge
 Pöchhacker, F., Shlesinger, M. (2002) *The Interpreting Studies Reader* Routledge
 ダニエル・ジル (2009, 2012 田辺希久子他 訳) 通訳翻訳訓練 基本的概念とモデル みすず書房
 草柳益和 (1998) 会議通訳 (同時通訳 / 逐次通訳) への道. 通訳への道. 法学書院編集部編 法学書院
 小林淳夫 (1988) 『通訳の極意 - 達人のテクニックとトレーニング方法 -』 南雲堂
 小松達也 (2005) 『通訳の技術』 研究社
 近藤正臣 (2015) 『通訳とはなにか ― 異文化とのコミュニケーションのために』 生活書院

柴田パネッサ清美 (1997, 2004) 『はじめてのウイスパリング同時通訳』 南雲堂

--- (1998, 2005) 『実践ゼミ ウイスパリング同時通訳』 南雲堂

染谷泰正 (1996:27-44) 「通訳訓練手法とその一般語学学習への応用について ～第 47 回通訳理論研究会報告要旨～」『通訳理論研究 11』 第 6 巻 2 号

稲生・染谷 (2005) 「通訳教育の新しいパラダイム—異文化コミュニケーションの視点に立った通訳教育のための試論」『通訳研究』 第 5 号 (pp. 73-109)

西山千 (2000) 「日本通訳学会第 1 回大会 記念講演記念講演: 二カ国語の間 (はざま)」『通訳研究』 創刊号
日本会議通訳者協会 入会案内 <http://www.japan-interpreters.org/jaci/membership/> (2015/12/22 21:04)